

「高倉の昔ばなし」より

九番 浅間山の白蛇

平成十七年一月

高倉郷土芸能保存会道化芝居台本

ナ

昔の人は毎月朔日、十五日には必ず神仏へ参詣するのがならわしになっていた。今日はお朔日とあって、寺の前の竜蔵さんと、トウシ屋さんの彦七つあんは浅間様へ参詣に来て、急な男坂を登って来た。

太鼓

ニンバで幕開け 二人坂を登る。

太鼓×

竜吉

「彦さーん、おらあどうも訊んねえ、どうもおかしい、訊んねエ、訊んねエ」

彦七

「うーう竜さんナア、さつきからブツブツあにがそんなに訊んねえだい」

竜吉

「だってよう、この浅間様ア高倉のもんだいナア、黒須クルスのもんじゃねえやいなア」

彦七

「う、う、そうっくれえじゃあねえ、昔っから高倉のもんに決まってるあ」

竜吉

「うう、そうだいナア、だからおかしいだア、じゃあどうして余所の黒須の方なんずーつん向いてんだんべえばあ」

彦七

「うーん、そうええば確かに妙だア、下手ア作ったもんだア、女坂ア降りてヨ又男坂ア登ってよう、骨ベエ折れてしょうがねえやいなあ、ああ、ああ、でもあんとかやっと登りきったア」

二人

「ああまいった まいった」

台に上り、腰を延ばし、手をかざし遠くを眺める

竜吉

「あああ、登んにやあ骨だけんど、こかア何時でもいい眺めだなあ、彦さん見ろや、ありや、日光だナア、こっちゃあ筑波山だナア、川越かあこいもめえらア、入間川イリマガなんざアすぐそこだあ」

彦七

「アレアレ長エつらの男が朝っから這って歩いて酔ばれエかなあ、だれんど酔ばれエにしちゃあバカに威勢がいいなあ。子供がイラ廻りでさうエえてんなあ、だんだんこつちええ来んなああつけえら鶉ぬ木かナア大さあぎだナア」

竜吉

「彦さん、彦さんあにゆう言っただいよく見ろい、確かにつらあ長工が耳あおっ立ってんで廻りにいんなあ子供じゃねえ、みんな大人だで良く見ろやあ」

彦七

「うう、あんだア馬だあ、馬が逃げたのか、ああでも捕まったようだア」

竜吉

「あつけえらあもう鶉ぬきゆう過ぎて向え黒須だあ、さあお詣りだあ」

太鼓

ニンバ 二人は社殿へ 多三郎、孝吉登ってくる。

太鼓×

多三郎

「孝さん孝さん、いつ来てもこの坂あ難渋な坂たなあ、よくまあ天王様ん時の山車やヤグラあこの急坂あ上げるもんだなあ。よく一人も怪我あしねえもんだなあ」

孝吉

「ああそりやあ、あんつつたつて神様アついてんかんなあ」
「ああやつと山工登ったなあ」

二人は大きく延びをする 多松を見上げ

多三郎

「あー、まあ何時来て見てもこの松あいい格好だなあ」

孝吉

「お寺の松と、どっちが太エかなあ、まあいい勝負かなあ」

多三郎

「お寺の松ってええば、こねえだ大西の与七つあんが言ったつけがなあ、お寺の松のコブタン球の辺りエえある晩火がくっついてたかな。そべえ行って見ただよ、そうすと火あ消えてあにも見えねえ、気のセエかともつて道まで出て振りけえたら又火あついてたと、さすが度胸のいい与七つあんもゾー、としたとよう」

孝吉

「へー気味の悪イ話だなあ」

社殿から二人戻り四人となる

「ようお、上道の孝さんに、新田の多つさん、早かつたなあ、ご利益あやられたなあ」

「おお、竜さんに彦さん、ご利益のこたあ心配ねえよう二人で無くなるようなそんな貧乏な浅間様じゃあねえよう、でっかい願でも掛けてくんやよう、ところであにか面白え話うしてたようだったなあ」

「ああにこの松う見てな、お寺の松の話よ」

「ところでこの松のあのウロに居るちゆう白蛇の話あ本当だともうかい、

息うしねえで木の廻りゆう三回廻んと白え蛇シレあ出て来るつちゆうがなあ」
そりやあウソにきまつてべえ、そんなに息きう止れえつかあねえかなア」

「でもおらが隣の総代ソウダエ様の話にあ、神主カンソウサマ様がこんだ拝んで蛇う出して見せる
つつつてたつて・・・エ云ユつてたでえ」

「へーえあの神主様にそんなことが出来んのかなあ」

「あんでも權大あんとかつちゆう位でな、県社の広瀬の神主もやって、とつてもえれい神主でな、地元じゃあツあつあんだけんど余所じゃあ高倉様つてんとよう」

「フーンじゃあ、おれらえも一所に見めせてもらあべえ」

「ウーンそうすべえそうすべえ、皆ゆに云うべえや」

皆

太鼓

四丁目 皆ちりぢりにかけ出す 太鼓 鎌倉にかわる 皆ステージ集 神主入場

太鼓×

総代

「ああどうも今日は忙しゆうにとんだお願えで申あもつし訳りせん」

神主

「ハアこれはこれは総代殿、皆もお元気で何より何より」

総代

「ええーとう神主様、みんなが一つ教えてもれえてえつてんですが、どうしてこの浅間様あ黒須の方をつん向いてんですい」

神主

「ハアハアそのご懸念はもつともじゃがな、ここは富士塚形でな、富士山へ登山するよう、わざわざ急坂にしたのじゃ。又社を通して富士の山を遥かに拝む遥拝式に建ててあるので富士南を向いて拝むようになってるのじゃ」

総代

「へーえどうだいみんな訳ったかいありがてえ話だんべえ」

若者

「じゃあ神主様中野ッ原で富士山を拝んでも同じですかい」

総代

「○さんむずかしゆう云うじゃあねえ、今日は白蛇様あ見せてもらあだんべえ、神主様じゃあお願い致します。」

神主

「ハアではポツポツ白蛇様に現われて貰いましょうぞ。皆も拝んで下されえ・・・」

高天の原に知れ渡る、浅間山の松の木の、白蛇様よお姿を、現し給え見せ給え、畏み畏み物申す。

ア、出て来い出て来い白い蛇 出て来い出て来い白い蛇

あっちの水あ苦いど あっちの水あ苦いど

黒須の酒あまずいど 黒須の酒あまずいど

おらがの酒あうーめえど おらがの酒あうーめえど

出て来い出て来い白い蛇 出て来い出て来い白い蛇

仕掛けの白蛇が出て幕となる

ナ

白蛇の仕掛は如何でしたか。
 あの美しかったお寺の松も、この浅間山の二本の松も、昭和二十年代共に枯れてしまい、浅間山自体も昭和三十年後半開発され、跡形もなくなってしまう。今では白蛇語りもすっかり忘れられてしまっています。
 この芝居でこんな話もあったと遠い昔を思い出して頂ければ幸いです。
 有難うございました。

配 役

寺の前の竜吉	西澤 章	ナレーター	田代 浩嗣
とうし屋の彦七	中谷 昇	囃子方 笛	田代 甲平
新田の多三郎	西澤 透	太鼓	田代 浩嗣
ういみちの孝吉	西澤 正行	〃	田代 浩嗣
総 代	西澤 要作	鉦	山畑 吉司
湊っあん 神主	西澤 洋一郎	拍子木	窪 幸美
馬 引	中野 好男	幕引	西澤 嘉幸
若 者	田代 健司		